

第四十節の秘められた歴史——第二十番

第二の災い — 第七部 — エゼキエル

Jeff Pippenger

2026-07-29

預言者エゼキエルがその冒頭の節において三十歳であったと理解することは、聖書的に妥当な理解である。

第三十年の第四の月、その月の五日に、私がケバル川のほとりで捕囚の民の中にいたとき、天が開かれ、私は神の幻を見た。その月の五日、すなわちエホヤキン王の捕囚の第五年に、主の言葉がカルデヤ人の地、ケバル川のほとりで、ブジの子である祭司エゼキエルに明確に臨み、そこで主の御手が彼の上にあった。エゼキエル 1:1-3.

「第三十年」は特定のヨベルの周期に基づくものであり、それはヨシヤ王によって始まり、第四十章第一節をもって終わったと信じる者たちもいる。

われわれの捕囚の第二十五年、年の初め、その月の十日、都が打たれてから第十四年、そのまさにその日に、主の御手がわたしの上にあり、わたしをそこに連れて行った。エゼキエル 40:1.

聖書年代表研究者たちは、第四十章第一節の日付を、紀元前573年4月28日、あるいは同年10月22日のいずれかと定めている。すべての預言者は終わりの日々を指し示しているので、紀元前573年10月22日という秋の日付は、紀元前622年5月5日、いわゆる「ヨシヤの大いなる過越」において五十年前に始まった一つの線のオメガの日付である。

三十という数は、祭司たちが奉仕を始めるときに三十歳でなければならなかったことの象徴である。エゼキエル書一章一節から三節が、エゼキエルの年齢を三十歳と特定しているのであれ、あるいは単に彼が祭司であることの象徴として示しているのであれ、いずれにしても彼は三十歳として表されることになる。また、一節の「三十年」が、他の人々の考えるように、紀元前六二二年のヨシヤの大いなる過越以来の第三十年を表しているとしても、その預言的含意はなお同じである。

ヨシヤは「土台」を意味し、彼の大きな過越は、紀元前573年の贖罪日にあたる10月22日に終わるヨベルの期間を開始した。ヨシヤから10月22日に至る「ヨベルの線」は、1840年から1844年の歴史と一致している。1840年の土台は、王ヨシヤによって表され、またジョサイア・リッチによっても表された。10月22日は、贖罪日の角笛とともにヨベルのラッパの角が吹き鳴らされることによって表された。

あなたは自らのために七つの安息年を数えなければならない。すなわち七年を七たびである。そしてその七つの安息年の期間は、あなたにとって四十九年となる。次いで第七の月の十日、すなわち贖罪の日に、あなたはヨベルの角笛を鳴り響かせなければならない。あなたがたはその角笛を、あなたがたの全地にわたって鳴り響かせなければならない。レビ記 25:8, 9.

エゼキエルは、ヨシヤ王から十月二十二日に至るヨベルの系譜の中に位置づけられており、その系譜は、一八四〇年から一八四四年に至るまでの黙示録十章の第一天使および第二天使を表している。エゼキエルは、第一天使と第二天使のミラー派、および第三天使の十四万四千人を表している。エゼキエルは十四万四千人の祭司職を表しているが、彼の主要な預言的特質は、彼が預言者であるという点にある。

預言者、祭司、そして王

三十歳で奉仕を始めた聖書の人物が三人いる。エゼキエルと並んで、ダビデとヨセフである。彼らは皆三十歳で奉仕を始めたので、皆祭司である。ダビデは王の象徴であり、ヨセフは祭司であり、エゼキエルは、預言者・祭司・王から成る三重の栄光の王国における預言者である。

しかし、預言者エゼキエルを象徴としていかに適用しようとも、彼は祭司である。そして、ヨシヤから10月22日までのヨベルの系列において適用するならば、エゼキエルは祭司であり、1840年から1844年までの歴史、ならびに王ヨシヤから紀元前573年10月22日までによって予表される、十四万四千人の印する時における一人の祭司を表すことになる。

二十二

聖書は、エゼキエルが二十二年間奉仕したことを明確に示している。「二十二」は、神性と人性との結合の旗印である十四万四千人を象徴している。ヨシヤの過越から第四十章の十月二十二日のヨベルの祝祭に至るまでに表象される歴史において、ヨシヤの過越は、1838年および1840年におけるジョサイア・リッチの働きを予表していた。その働きとは、第一の災いと第二の災いの時の預言を提示することであった。今や、第一および第二の災いの預言は、先駆者たちが認識していたよりもはるかに大きいものであることが明らかとなっている。

聖書の預言者としてのエゼキエルは、その著作の中で、他のいかなる聖書著者よりも多く、より具体的な年代を示している。

エゼキエルは、聖書の預言における「一日が一年に相当する」という原則のオメガである。民数記においては、この一日一年の原則へのアルファの言及が、カデシュにおける最初の反逆として示されており、それが荒野での四十年の放浪をもたらした。そして最後の、すなわちオメガの反逆は、エゼキエル書第四章において、エルサレムが滅ぼされることによって示されている。

アルファ

あなたがたがその地を探った日数、すなわち四十日の数にしたがい、一日を一年として、あなたがたは四十年のあいだ自らの咎を負わなければならない。こうして、あなたがたはわたしの約束の取り消しを知るであろう。主であるわたしが語ったのである。わたしに逆らって共に集まったこの悪しき会衆のすべてに、わたしは必ずこのことを行う。この荒野で彼らは滅び失せ、そこで死ぬであろう。民数記 14:34, 35.

オメガ

あなたはまた、左の脇を下にして横たわり、イスラエルの家の咎をその上に負わなければならない。あなたがそのように横たわる日の数に応じて、彼らの咎を負うのである。わたしは彼らの咎の年数を、その日数に従ってあなたに負わせる。すなわち三百九十日である。こうしてあなたはイスラエルの家の咎を負わなければならない。そしてそれを終えたなら、再び右の脇を下にして横たわり、ユダの家の咎を四十日間負わなければならない。わたしは一日を一年としてあなたに定めた。それゆえ、あなたはエルサレムの包囲に向かって顔を向け、腕をあらわにして、これに向かって預言しなければならない。エゼキエル4:4-7。

カデシュとエルサレムの滅亡は、1日を1年とする原則を表すアルファとオメガの反逆を象徴している。「1日を1年とする原則」はミラー派の主要な規則であり、ヨシヤ王のヨベルの線において10月22日まで予表されている1840年から1844年の歴史においてもそうであった。エゼキエルは、他のいかなる預言者にもまして多くの日付を提示している。エゼキエルにおけるその年代設定の中に、ヨベルの線が特定されており、それによってエゼキエルの証しは、第一天使および第二天使の歴史、さらにその後の第三天使の歴史へと直接結び付けられている。

「ヨベルの線」とともに、エゼキエルは三百九十日の間その片側を下にして横たわり、次いで四十日の間もう一方の側を下にして横たわる。「四百三十」は旧約と新約の象徴である。というのも、エジプトにおける四百年の捕囚に関するアブラムへの契約の約束は、使徒パウロによる三十年という第二の証人を得たからである。かくして、『旧き』方のアブラム（のちのアブラハム）と、『新しき』方のサウル（のちのパウロ）は、その証しを合わせて、四百三十年を永遠の契約の象徴として確立したのである。「三百九十日」の間、「あなたはイスラエルの家の咎を負わなければならない。」また、「あなたはユダの家の咎を四十日の間負わなければならない。」右側と左側とを合わせると、アブラムとパウロに等しい。

契約は常に、従順か不従順か——すなわち生か死か——に基づいていた。ミラー派の歴史における一年一日原則は、生か死かの問題であり、その歴史は第一の天使によって永遠の福音として告げ知らされた。「福音」は生か死かの問題であり、ミラー派の歴史における生か死かを試す争点は、一日が一年に等しいという原則の文脈の中に置かれていた。第一の天使の使命に力を与えた予告は、第二の禍いについての三百九十一年十五日の預言であった。エゼキエルがその左脇を下にして横たわった三百九十日のうちに、第二の禍いの三百九十一年十五日の時の預言の例証がある。この預言を正しく分割するには預言的識別力を要するが、それはまさしく、ユダ族の獅子が真夜中の叫びの使命の封印を解き続ける働きにほかならない。

私は、エゼキエルは十四万四千人の象徴として扱われなければならないと主張するが、何よりもまず、彼は預言の霊の賜物の象徴として扱われなければならない。すなわち、それが終末時代の預言者の顕現として表される場合であれ、あるいは、線の上に線を加える方法論の原則を理解する契約の民の顕現として表される場合であれ、そうである。

私は、三百九十一年十五日の預言に関してエゼキエルが与える光は、土ぼこりを払う者がその宝石をより大きな小箱の中へ投げ入れることと符合している、と主張する。

わたしは、神殿が完成するとき、エゼキエルからの光が頂石の使命に不可欠な要素であると主張する。

エゼキエルは第四十章第一節において十月二十二日の位置にあり、そこで将来の神殿の幻が彼に与えられている。その神殿は十四万四千人の神殿であり、エゼキエルはその数の象徴である。その集団は、第三の、そして試金石となる試験に至る前に、二つの試験を通過しているであろう。エゼキエルは神殿において光を受ける者として描かれており、それゆえ、彼が象徴として生み出す光は、ダニエル書第十章と一致して、神の民が至聖所に入るときに来る光を表している。

封じが解かれた『イエス・キリストの黙示』の光は、恩恵期間が閉じる直前に解き明かされる。

また彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義なる者は、なおも不義を行わせよ。汚れた者は、なおも汚れたままでいさせよ。義なる者は、なおも義を行わせよ。聖なる者は、なおも聖なるものでいさせよ。」黙示録 22:10, 11.

第十一節において恩恵期間が閉じる直前、「時は近づいている」のであり、それゆえイエス・キリストの黙示はその時に封じが解かれている。なぜなら、「時は近づいている」からである。

イエス・キリストの黙示。これは、ほどなく起こるべき事どもを、そのしもべたちに示すために、神がキリストにお与えになったものであり、キリストは御使いを遣わして、これをそのしもべヨハネにお示しになった。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち自分の見たすべての事について証しした。この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、その中に書かれていることを守る人々とは幸いである。時は近づいているからである。黙示録 1:1-3

ラオディキア的セブンスデー・アドベンチズムのための恩恵期間は日曜休業令の時に閉じられ、またアドベンチズムはエゼキエル書第九章においてエルサレムとして表象されている。そこでは、その地と教会において行われている忌むべき事のために嘆き悲しみ、叫ぶ者たちが印を受ける。封印は、イスラムの東風が諸国民を怒らせている時、すなわち恩恵期間が閉じる直前に行われる。エゼキエル書第八章において、アドベンチズムの四世代は完結し、第四世代は太陽を拝む二十五人の指導者たちによって象徴されている。

その幻は、六、六、六によって表される執行猶予期間の終了、すなわち日曜法の直前に、象徴的に与えられた。

第六年の第六月の五日に、私が自分の家に座しており、ユダの長老たちが私の前に座していたとき、そこで主なる神の御手が私の上を下った。そこで私が見ると、見よ、火のように見える一つの御姿があった。その腰のように見える所から下は火であり、その腰から上は輝きのように見え、琥珀の色のものであった。すると彼は手の形のようなものを差し伸べ、私の頭の髪の毛をつかんだ。そして霊が私を地と天の間に持ち上げ、神の幻のうちに私をエルサレムへ、北に面した内門の入口に連れて行った。そこには、ねたみを引き起こす、ねたみの偶像の座があった。そして、見よ、イスラエ

ルの神の栄光がそこにあった。それは、私が平野で見た幻のとおりであった。エゼキエル 8:1-4.

第六年、第六月、第五日におけるその幻は、ラオディキアのアドベンチズムに対する恩恵期間が閉じる時、すなわち日曜法の象徴である「666」の直前に与えられた。その幻は、エゼキエルが「平野で見た幻と同じ」ものであった。彼が平野で見たその幻は、前の第三章に記されている。

そこで私は立ち上がって平地へ出て行った。すると見よ、主の栄光がそこに立っていた。それは、私がケバル川のほとりで見た栄光のようであった。そこで私はひれ伏した。エゼキエル 3:23.

「平野」の幻、すなわち第六年、第六月、第五日の幻は、エゼキエルが以前ケバル川のほとりで見た幻であった。

さて、第三十年の第四の月の五日に、わたしがケバル川のほとりで捕囚の民の中にいたとき、天が開け、わたしは神の幻を見た。エゼキエル1:1.

エゼキエルがケバル川のほとりで「見た」「神の幻」は、平野の幻であり、またそれはエゼキエル書第八章から第十一章の幻でもあった。これらの幻は、エゼキエルが聖所の中を見入るという文脈の中で示されており、そこにおいて第十章の「marah」の鏡を見る幻が成就するのである。エゼキエルは、恩恵期間の終了の直前にイエス・キリストの黙示がもたらされる時、至聖所から放たれる預言的光にあずかる者たちを表している。

過越から始まり十月二十二日に終わるヨシヤ王のヨベルの線を私たちが見いだすとき、それは、レビ記二十三章に示されている春の祭りと秋の祭りの象徴を見いだすことにほかなりません。そこでは、春と秋の祭りがそれぞれ二十二節ずつをもって示されており、それは、エゼキエルの務めが二十二年間であったことと対応しています。ヨベルの線の第三十年にエゼキエルを位置づけることにより、エゼキエルの誕生はヨシヤのリバイバルと一致することになります。もし彼がヨベル周期の第三十年に三十歳であったなら、エゼキエルはヨシヤの改革の時に生まれたことになります。

エゼキエルは、信仰によって至聖所に入る者たちの象徴である。いったんそこに入ると、彼らは、人間相互の関わりの複雑な作用を表す、輪の中の輪を見る。黙示録第十章におけるヨハネの場合と同様に、エゼキエルはミラー派を表すが、より直接的には十四万四千人を表している。彼の、三百九十一年と十五日という並行する時の預言は、エルサレムの滅亡をもって示されるラオデキヤ的アドベンチズムに対する最後の裁きを例証しており、その中には三十八と四十の謎も含まれている。

それは四百三十年という象徴性を含んでいる。

それは、1333年から1337年、1449年から1453年、および1840年から1844年によって表される四年間の期間を含んでいる。

このきわめて重要な主題についての考察を、次の記事において始めることにする。

「イザヤ、エゼキエル、そしてヨハネに与えられた幻のうちに、わたしたちは、天が地上で起こっている出来事と如何に密接に結びついているか、また、神に忠実な者たちに対する神の配慮が如何に大きいかを見るのである。」『Testimonies』第5巻、753頁。

「キリスト御自身が神殿の主であられた。もし主がそこを去られるなら、その栄光も去るのであった——その栄光とは、かつて至聖所において贖罪所の上に現れていたものであり、そこへは大祭司が年にただ一度、大いなる贖罪の日に、ほふられた犠牲の血を携えて入ったのである（それは、世の罪のために流された神の御子の血を予表していた）、そしてその血を祭壇に注ぎかけたのであった。これがシェキナー、すなわちエホバの目に見える住まいであった。」

「ウジヤ王の死んだ年に、私はまた主が高く上げられた御座に着いておられるのを見、その裾が神殿に満ちていた」と彼が言うとき、イザヤに示されたのはこの栄光であった〔イザヤ 6:1-8 引用〕。』『The Seventh-day Adventist Bible Commentary』第4巻、1139頁。

イザヤに与えられた幻は、終わりの日における神の民の状態を表している。彼らには、天の聖所において進められている働きを、信仰によって見る特権が与えられている。『また、天にある神の宮が開けて、その宮の中に契約の箱が見えた。』彼らが信仰によって至聖所を見つめ、天の聖所におけるキリストの働きを見るとき、彼らは、自分たちが汚れた唇の民、すなわち、その唇がしばしばむなしいことを語り、その賜物が聖別されて神の栄光のために用いられてこなかった民であることを悟る。彼らが、自らの弱さと無価値さを、キリストの栄光に満ちたご品性の純潔と麗しさとに対比するとき、絶望するのももつともである。しかし、もし彼らがイザヤのように、主が心に刻もうと意図しておられる感銘を受け入れ、神の前に自らの魂をへりくだらせるなら、彼らには望みがある。約束の虹は御座の上にあり、イザヤのために成し遂げられた働きは、彼らのうちにも行われるであろう。神は、砕かれた心からささげられる願いに応えてくださる。

「神のこの大いなる厳粛な働きの目的は、天の倉に納めるために束を集めることである。なぜなら、地は主の栄光で満たされることになっているからである。ゆえに、はびこる悪を目にし、汚れた唇から発せられる言葉を耳にしても、だれも意気消沈してはならない。暗黒の力が神の民に敵対して陣を敷くとき、サタンが最後の大いなる戦いのためにその軍勢を召集し、その力が強大で、ほとんど圧倒的に見えるときにも、神の栄光、すなわち高く上げられた御座と、それを取り巻く約束の虹の明白な幻は、慰めと確信と平安を与えるであろう。」『Review and Herald』1896年12月22日。

ケバル川のほとりで、エゼキエルは、北から来るかのようなつむじ風を見た。すなわち、「大いなる雲があり、その中に火が自らを包み込み、これを取り巻いて輝きがあり、その中からは琥珀のように見えるものが現れていた」。互いに交差し合う多くの輪が、四つの生きものによって動かされていた。これらすべての高い上には、「御座の形があり、その様はサファイヤの石のようであった。またその御座の形の上には、その上に人のように見える形があった」。さらに、「ケルビムのうちに、その翼の下に人の手の形が見えた」。エゼキエル1:4, 26; 10:8。これらの輪は、その構造があまりにも複雑であったため、一見すると混乱しているように見えたが、完全な調和のう

ちに動いていた。ケルビムの翼の下にある御手に支えられ、導かれている天の存在たちが、これらの輪を動かしていたのである。その上、サファイヤの御座には永遠なるお方がおられ、また御座の周囲には、神の憐れみの象徴である虹があった。

ケルビムの翼の下にある御手の導きのもとに、車輪のように入り組んだ諸事があったように、人間の出来事の複雑な展開もまた神の支配のもとにある。諸国民の争闘と騒乱のただ中であっても、ケルビムの上に座しておられるお方は、なお地上の諸事を導いておられる。

それぞれに割り当てられた時と場所を順次占め、知らず知らずのうちに、自らはその意味を知らなかった真理について証ししてきた諸国民の歴史は、私たちに語りかける。今日、すべての国民にも、またすべての個人にも、神はその大いなるご計画の中における一つの位置をお定めになっている。今日、人々も諸国民も、誤ることのない御方の手にある下げ振りによって測られている。すべての者は、自らの選択によって自分の運命を決しつつあり、しかも神は、ご自身の目的の成就のために、すべてを統べ治めておられる。

「偉大なる『わたしはある』なるお方が、その御言葉のうちに記し、預言の連鎖において一つ一つの環を結び合わせつつ、過去の永遠から未来の永遠に至るまで示してこられた歴史は、時代の進行の中で今日わたしたちがどこにいるのか、また来たるべき時に何が予期されるのかを、わたしたちに告げている。預言が今に至るまで成就すると予告してきたすべてのことは、歴史の頁の上に跡づけられており、なお将来に属するすべてのことも、その定められた順序に従って成就することを、わたしたちは確信してよい。」『教育』178頁。